

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

親鸞の生きた人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こそうと、親鸞の思想・信念を時代社会の関心の言葉で思索し、考え直す試みとして公開講座を行っています。

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」④1

むなしくすぐるひとぞなき

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第101回と102回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、101回では「第二十二願成就文」について、102回では「浄土の菩薩」について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々と間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第100回から一部を紹介する。

（親鸞仏教センター嘱託研究員 越部 良一）

■人間が成就するとは大涅槃に^あ遇うこと

天親菩薩の『浄土論』では、浄土の功德が二十九の形で語られています。そのなかで仏の功德が八つ言われている、その八番目にあるのが、本願力を語る「不^ふ虚^こ作^さ住^{じゆ}持^じ功^く徳^{とく}」です。これを親鸞聖人は『教行信証』の「行巻」で、本願とは何であるかをあらためて問い直すところに引かれています（『真宗聖典』198頁、東本願寺出版、以下『聖典』）。不^ふ虚^こ作^さ住^{じゆ}持^じと^というのは、つまり、む^むな^なしく過^あぎ^ぎる者^{もの}はない、と^と言うのですが、私の師匠であった安田理深先生は、人間の悲劇^ひと^と言^いって、貧^ひ乏^ふとか、病^び気^きとか、そ^そう^うい^いう^うもの^{もの}が辛^あい^いと^という^いう^う以上^いに辛^あい^いもの^{もの}がある。それは、この人生を生きて無駄^むだ^だだった^たとい^いう^うこと^{こと}だと。これほど辛^あい^いこと^{こと}はない。このよう^うにお^おっ^っし^しゃ^ゃって^ていま^ました。いろ^ろなる^る功^く成^{じやう}り^り名^{めい}遂^{すい}げ^げて^てとい^いう^う話^わが^があ^あり^りま^ます^すけ^けれ^れど、名^{めい}利^りが^がた^たと^とえ^え満^{まん}た^たさ^され^れて^ても、何^なか^か満^{まん}た^たさ^され^れない^い形^{かたち}で^で人^{にん}生^{じやう}が^が終^{しゆう}わ^わる^るこ^ことは^は起^おこ^こり^りう^うる^るわ^わけ^けです。曇^{とん}鸞^{らん}大^{だい}師^しは、そ^そう^うい^いう^うこ^こと^とを^を譬^ひ喩^ゆと^として^{して}解^{かい}釈^{しやく}の^のな^なか^かに^に出^でし^てお^おら^られ^れま^ます。金^{きん}銀^{ぎん}財^{さい}宝^{ほう}を^をた^たく^くさん^{さん}貯^ちめ^めた^たと^ところ^ろに、大^{だい}飢^き饑^きが^がく^くると、食^{じき}糧^{りやう}は^はた^たち^ちま^まち^ち底^ぞをつ

いてしまう。お金を抱えて餓死したと。

金銀財宝といったものを当てにしてわれわれは生きていることが多いわけですが、当てにならないと。本当に空しく過ぎないとは、どういうものに出遇えばよいのか。こういう課題が、浄土に出遇うということなのだ。浄土に出遇うということは、空しく過ぎる者がいないということ。如来の本願が大涅槃から立ち上がってわれわれに呼びかける。その涅槃に遇うはたらきが、無限にはたらきうる力になる。それを親鸞聖人は、「本願力にあいぬれば むなしくすぐるひとぞなき 功德の宝海^{ほうかい}みちみちて 煩悩^{ぼんごう}の濁水^{じやくすい}へだてなし」（『聖典』490頁）とおっしゃる。煩悩がどれだけ濁っていようと、本願に遇うことによっていただける利益は、空しく過ぎないということなのだ。大涅槃に触れることは、ある意味で絶対満足なのです。人間が成就するということは大涅槃に遇うということです。

しかし、本願との出遇いをここまで吟味することは容易なことではない。本願に遇うということは、本願を対象的に見るのではないのです。本願というものを考えるのでもない。本願を感じて、本願のなかに生きる、本願を自分自身の依り処にする。そういうことが成り立つと、もう空しく過ぎることはない。そういう呼びかけが親鸞聖人から出されている。

■阿弥陀如来の仕事に参画する

不^ふ虚^こ作^さ住^{じゆ}持^じ功^く徳^{とく}は^は浄^{じやう}土^どの^の功^く徳^{とく}で^です。浄^{じやう}土^どの^の功^く徳^{とく}な^なの^のだ^だけ^けれ^れど^も、浄^{じやう}土^どに^に行^いっ^てか^から^ら味^{あじ}わ^わう^う功^く徳^{とく}で^では^はな^なく^くて、浄^{じやう}土^どの^の功^く徳^{とく}が^が向^{むか}う^うか^から^らく^くる^るわ^わけ^けです。

本願力回向として、凡夫の世界を包むべく、向こうからはたらいてくる。本願力回向としてはたらいてくる。こういうものに出会う。

本願と本願成就とは、本願が因であって本願成就が果としてくるというのではなくて、願と願成就が常に「南無阿弥陀仏」という一点でわれわれに呼びかけてくる。これが「大行」と言われるのは、人間が行ずるのではなくて本願が行ずるからです。本願が行ずる形が「南無阿弥陀仏」である。その「南無阿弥陀仏」は願海をわれわれに開いてくる。その「南無阿弥陀仏」を信ずる。そういう「南無阿弥陀仏」であると信ずる。願海に触れるということは、「大信海」、信心が海になる。その信心において、本願と本願力の成就とがわれわれに呼びかけ、われわれを励まし、凡夫である私を仏道を成就せしめる存在に転じてくださるわけです。

でも、自分が仏に成るわけではない。われわれはどこまでも愚かな凡夫である。「悲しきかな、愚禿鸞」（『聖典』251頁）とおっしゃるのは、そのことである。凡夫であるままに本願力をいただけるのだと。「煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌」（『聖典』280頁）が大涅槃の功德をいただくことができる。それが本願を信ずること。凡夫だからだめだというのでもないし、凡夫を止めて仏に成るのでもない。凡夫であるままに仏道を成じていこう。こういうことが成り立つのが本願力である。本願力が私どもを呼び、私どもを励まし、私どもを歩ませてくださる。こういうことが本願の教えと出会うことだと思うのです。

それは、決して個人関心でできるという話ではない。「南無阿弥陀仏」の回向の仕事として、そういう課題を私たちは感じながら生きていける。「難思議往生を遂げんと欲う」（『聖典』356頁）と親鸞聖人もおっしゃるように、意欲としてわれわれは阿弥陀如来のお仕事に参画できる。阿弥陀如来のお仕事は十方衆生にかかっている。私どもはそれを信ずることで、「よくぞ信じてくれた」、こう言って励ましてくださる仏陀の願いが聞こえてくるのです。

親鸞仏教センターの動き

(2017年5月～2017年7月) 一抄出

■2017年

- 5/1 第37回『西方指南抄』研究会「菩薩の倫理とその根拠」東京大学・国際日本文化研究センター名誉教授：末木文美士氏（文京区・親鸞仏教センター）
- 5/8 第200回英訳『教行信証』研究会
- 5/9 第101回（通算第152回）連続講座「親鸞思想の解明」（千代田区・東京国際フォーラム）
- 5/11 第17回研究交流サロン「近代日本のナショナリズムを考える——「明治の青年」を事例にして」筑波大学人文社会系教授：中野目徹氏、愛媛大学法文学部講師：中川未来氏（文京区・親鸞仏教センター）
- 5/12 ご命日のつどい
- 5/15 第13回『教行信証』と善導』研究会
- 5/29 第38回『西方指南抄』研究会
- 5/30 第176回清沢満之研究会
- 6/2 第24回日本近代仏教史研究会研究大会（東北大学）：長谷川研究員発表「『大乘仏教』をめぐる言説形成——井上円了を中心にして——」
- 6/5 第1回「三宝としてのサンガ論」研究会
第102回（通算第153回）連続講座「親鸞思想の解明」（千代田区・東京国際フォーラム）
- 6/6 第56回現代と親鸞の研究会「よく生きるということ」哲学者：岸見一郎氏（文京区・親鸞仏教センター）
- 6/9 ご命日のつどい
- 6/13 親鸞仏教センター臘扇忌：鸞音忌法要
- 6/14 第201回英訳『教行信証』研究会
- 6/20 第177回清沢満之研究会「リフォームとしての清沢満之——『教団』の世紀と精神主義——」天理大学人間学部教授：岡田正彦氏（文京区・親鸞仏教センター）
- 6/26 第14回『教行信証』と善導』研究会
- 7/1 第18回国際真宗学会学術大会（武蔵野大学）：青柳研究員発表「『自信教人信』について」
- 7/3 第202回英訳『教行信証』研究会
第103回（通算第154回）連続講座「親鸞思想の解明」（千代田区・東京国際フォーラム）
- 7/18 第15回『教行信証』と善導』研究会
- 7/19 公益財団法人日独文化研究所学術交流シンポジウム パネルディスカッション「文化と文明」：長谷川研究員発表「明治期における仏教形而上学の形成」
- 7/21 ご命日のつどい
- 7/24 第2回「三宝としてのサンガ論」研究会
- 7/26 第178回清沢満之研究会

掲載論文

- 5月 『近代仏教』第24号
長谷川研究員「〈書評〉三浦節夫『井上円了——日本近代の先駆者の生涯と思想』」